

陳新仁 等（著）『語用学新發展研究 （新時代外国語言文学新發展研究叢書）』

北京：清華大学出版社, 2021,
xviii + 283p., ISBN 978-7-302-57313-5

李 丹

1. 本書の目的と構成

本書は「新時代外国語言文学新發展研究叢書」の一部であり、中国南京大学の陳新仁教授が執筆代表としてまとめたものである。陳氏は中国ロジック学会語用学専門委員会 (China Pragmatics Association) の前会長であり、語用論研究で国内外で広く知られている。氏は、最近十年間における中外語用論の重要なトピック、重要な論文と著作、高被引用論文、高被引用研究者を体系的に紹介しただけでなく、語用論における經典的理論の新發展、新学科、新視点および各種のインターフェース研究についても体系的に説明している。主流研究方法を簡潔に紹介し、語用論の最新の研究方法や最新の応用分野に焦点を当てているものである。本書は語用論の最先端と發展動向を反映しており、この分野の専門家や愛好者にとって、中外語用論の主流理論の發展経緯や研究視点の変遷などを十分に理解するための重要な参考となっているものである。

本書は4章で構成されている。以下に目次を示す。(目次は拙訳による)

第1章 概説

1.1 語用論の縁起および国内での興起

1.1.1 語用論の縁起

1.1.2 中国における語用論研究：導入と発展

1.2 語用論の流派

1.2.1 英米学派

1.2.2 ヨーロッパ大陸学派

1.2.3 最近十年の新趨勢：統合派

1.3 最近十年の語用論における国内外の重要なトピック

1.3.1 最近十年の国内の語用論における主要なトピック

1.3.2 最近十年の国外の語用論における主要なトピック

1.3.3 最近十年の国内外の語用論における高頻度トピックの比較

1.4 最近十年の語用論における国内外の高被引用著作

1.4.1 最近十年の国内の語用論における高被引用著作

1.4.2 最近十年の国外の語用論における高被引用著作

1.4.3 最近十年の国内外の語用論における高被引用著作の比較

1.5 最近十年の語用論における国内外の高被引用論文

1.5.1 最近十年の国内の語用論における高被引用論文

1.5.2 最近十年の国外の語用論における高被引用論文

1.5.3 最近十年の国内外の語用論における高被引用論文の比較

1.6 最近十年の語用論における国内外の高被引用研究者

1.6.1 最近十年の国内の語用論における高被引用研究者

1.6.2 最近十年の国外の語用論における高被引用研究者

1.6.3 最近十年の国内外の語用論における高被引用研究者の比較

第2章 語用論理論研究の新発展

2.1 語用論理論の新発展

2.1.1 発話行為理論の新発展

2.1.2 会話含意理論の新発展

- 2.1.3 関連性理論の新發展
- 2.1.4 ポライトネス理論の新發展
- 2.1.5 順応理論の新發展
- 2.2 語用論の新たな視点
 - 2.2.1 変異語用論
 - 2.2.2 批評語用論
 - 2.2.3 臨床語用論
 - 2.2.4 歴史語用論
 - 2.2.5 対人語用論
 - 2.2.6 メタ語用論
 - 2.2.7 言語ミーム学
- 2.3 語用論のインターフェース研究
 - 2.3.1 語用論と言語学内部学科のインターフェース研究
 - 2.3.2 語用論と言語学外部学科のインターフェース研究
- 第3章 語用論研究方法およびその新發展
 - 3.1 コーパスの分類と選択
 - 3.1.1 コーパスの分類
 - 3.1.2 コーパスの選択
 - 3.2 語用研究の種類と分析単位
 - 3.2.1 語用研究の種類
 - 3.2.2 語用研究の分析単位
 - 3.3 コーパス収集方法とツール
 - 3.4 国外の語用論研究方法の新發展
 - 3.4.1 データの紹介
 - 3.4.2 コーパスの種類
 - 3.4.3 コーパスのモード
 - 3.4.4 研究の性質
 - 3.5 国内の語用論研究方法の新發展

3.5.1 データの紹介

3.5.2 コーパスの種類

3.5.3 コーパスのモード

3.5.4 研究の性質

3.6 国内外の近年の語用論研究方法の比較

3.6.1 コーパスの種類比較

3.6.2 コーパスのモード比較

3.6.3 研究の性質比較

第4章 語用論理論の応用の新展開

4.1 語用論応用研究の定義

4.2 国外の最近十年の語用論主要応用研究

4.2.1 中間言語語用論

4.2.2 翻訳語用論

4.2.3 文体語用論

4.2.4 法律語用論

4.2.5 X-ディスコース研究

4.3 国内の最近十年の語用論の主要応用研究

4.3.1 発話行為理論の応用研究

4.3.2 ポライトネス理論の応用研究

4.3.3 対人語用および語用アイデンティティの応用研究

4.3.4 異文化間語用の応用研究

4.3.5 中国語語用の応用研究

4.3.6 語用翻訳の応用研究

4.3.7 ビジネス語用の応用研究

4.3.8 法律語用、臨床語用の応用研究

4.3.9 語用教育研究

参考文献

附録1 国内外の語用論学術組織

附録2 国内外の語用論学術誌

学術用語一覧

2. 本書の内容

第1章では、言語学の新たな分野としての語用論の起源と流派について概説されており、teSpace 5.6R5 文献計量ソフトウェアを利用し、四つの次元（重要なトピック、高被引用の著作、高被引用論文、高被引用研究者）から、中外語用論が最近十年でどのように発展してきたかについて分析を行っている。著者は中国の語用論研究者が海外の会話分析といった重要な研究手法にまだ十分な注意を払っていないと指摘し、異なる学科の理論と手法を導入し、社会言語学、認知科学、コンピュータ科学などを継続的かつ効果的に語用論研究に取り組むべきだと述べている。

第2章では、「語用論理論研究の新たな展開」について述べている。この章には語用論の経典的な理論の新しい展開、新興する学科の視点、語用論と言語学の内外の学科とのインターフェース研究などが含まれている。特に、2.1.4で著者は、ポライトネス理論の新たな展開に焦点を当て、ポライトネス研究の新しい動向を紹介している。研究手法においては、ディスコース分析研究法が今でも（インポライトネス）ポライトネス研究の主流手法であり、言語行為が重要な分析ツールであることが強調されている。研究のトピックでは、インポライトネス研究の興隆と情動的ポライトネス、歴史的ポライトネスなどの新たな横断的なトピックの出現が、ポライトネス研究の範囲拡大に貢献できるのではないかと論じている。コーパスの選択では、自然言語コーパスとウェブ言語コーパスが特に好まれていることを指摘している。近年、中国の研究者が「礼貌研究」分野に大きな注目を集め、国際的なトップ学術誌で中国独自の「礼貌現象と理論」を探究し、さらに、それが中国の語用論研究者が国際的な語用論学界で重要な役割を果たしていることを示している。

第3章では、「語用論研究方法とその新進展」について述べている。この章では、主流の研究手法と最新の研究手法について説明したうえで、データに基づいて中外語用論研究方法の特徴とトレンドを分析している。具体的には、中外語用論研究で一般的に使用される主流の研究手法と、最近十年間の語用論の最新研究方法についても紹介している。例えば、コーパスの分類（直感、誘発、自然、借用という四つの異なるタイプ）と選択、語用論研究の種類（実証研究と非実証研究の二つの異なるタイプ）と分析単位、データの収集と分析の一般的な方法とツールなどが含まれることを紹介し、文献データを通じて中外語用論研究方法の特徴とトレンドも詳しく分析し比較している。

第4章では、「語用論理論の新たな応用展開」について詳しく論じている。最近十年間の中外の主要な語用論の応用領域について簡潔に説明したうえで、中国語用論の経典的かつ最新の応用研究領域に焦点を当てている。たとえば、言語行為理論を使用して、文学作品における言語行為の特徴を考察したり、授業中における教師と生徒の言語行為の相互作用の特徴を分析したりすることが強調されている。そして、ポライトネス理論については、政治的な発言や文学テキストでのインポライトネスの現象の研究で重要な進展を遂げていることを指摘している。また、対人語用理論と語用アイデンティティ理論については、コミュニケーションでの言語とアイデンティティの取り扱いを分析するために使用されていることも論じている。さらに、文化語用論と相互文化語用論については文化的な文脈での人間関係の相互作用に焦点を当てており、法律語用論と臨床語用論が注目されていることも論じている。最後に、語用論を語用能力の育成に応用した教育研究の状況が紹介され、語用論が応用分野で取得した著しい進展が示されている。

3. 本書の評価

評者は本書の特徴を三点まとめることができると考える。以下、これらについて述べる。

まず、本書は語用論の發展状況とトレンドを包括的に把握し、理論と実践、伝統と發展、国内と国外を兼ねている。具体的なデータの比較を通じて、中外語用論がトピック、理論、視点、方法、応用の面でどのように異なるかを明確に示している。語用論に興味がある読者、特に中英語用論の發展とトレンドを深く理解したい読者にとって、重要なものであり、非常に参考になると考えられる。

次に、本書の参考文献、附録、および學術専門用語一覧は非常に充実している。参考文献は、読者に中外語用論領域の研究動向と發展の軌跡を探るための参照点を提供している。

附録1には国内外の語用論學術組織が含まれている。これは非常に実用的であり、読者に対して語用論の學術活動を理解し、参加するための窓口を提供している。附録2では、語用論に関連する国内外の重要な學術誌を挙げており、これらの學術誌は研究者がこの分野の学者の最新の研究成果を知ることができるだけでなく、将来の自身の研究成果の発表にも情報プラットフォームを提供している。學術専門用語も漢英対訳されており、語用論の専門家、特に初学者にとっては語用論に関連する用語を参照するためのツールとなっている。

最後に、本書を執筆したほとんどの著者は中国ロジック学会語用学専門委員会の若手で多くの成果をあげている研究者であり、国内外の語用論の最新の理論と研究方法を把握している。読者が学科の發展動向を理解し、常に把握するのをサポートするためである。

ただし、本書が関連する知識点の紹介は、詳しさが一致していないことも気になるところである。また、著者の多くは英語語用論の専門家であるため、欧米と中国の語用論に重きをおいて比較を行っているが、東アジアの国々、例えば日韓の語用論の發展に関する情報は少なく、十分述べられていないかと思うことから、今後はそれらの研究が進めばよいと考える。

4. 終わりに

本書は語用論の分野の新しい発展と研究方向を深く掘り下げ、従来の語用論の理論だけでなく、それらの新しい研究視点と研究方法も提供している。これにより、語用論愛好者が、語用論の発展の軌跡を把握し、新しい動向を理解し、将来的にはこの分野で新たな課題を発見できるよう、研究を深め、継続的に行うためのサポートが提供される。世界の語用論研究における今後の展開の大きな可能性も、中国語用論研究の創新の段階に入ったことも読み取れる。中国の語用論学者が、中国語用論の体系を構築することで、世界の語用論研究もますます発展するであろう。同時に、本書はますます多くの関連分野の愛好者によって注目されるだろう。最後に、評者の力不足により、誤り、理解不足、取り上げるべきところの見落としなどもあろうかと思う。ご寛恕をお願いする次第である。

創価大学文学部非常勤講師